

Title	<研究報告>肺結核の一新外科的療法,胸腔内充填術(〔第4部〕外科療法部)
Author(s)	長石, 忠三; 辻, 周介; 美濃口, 玄; 久保, 克行; 高龜, 正治
Citation	京都大學結核研究所年報 (1950), 1: 97-98
Issue Date	1950-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/50943">http://hdl.handle.net/2433/50943</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

麻痺術では右側手術によつて立位に、左側手術によつて著明な横位にならんとする傾向を示す。又夫々の正面図と側面図とを比較する事によつて心軸廻轉の有無及び程度を知り得る。又手術によつて直接的に急激に圧迫が加わる他に、長期間中には滲出液の滯溜、虚脱肺の再膨脹等による影響も認められる。斯くの如く外科的肺虚脱療法を行う場合には手術方法、手術量等によつて差違はあるが、大凡前述の如き心臓位置の変動並に心軸廻轉を招來するから、手術に際しては一應この事を考慮に入れる必要があり、この検査目的に対しては、ペクトル心電図が最も好適であり、従つてペクトル心電図は肺結核外科に於て多大の應用價值を有するものと思われる。

## 肺結核の一新外科的療法、胸腔内充填術

長	石	忠	三	
辻		周	介	
美	濃	口	玄	(京大医学部口腔外科教室)
久	保	克	行	(國立千石莊病院)
高	龜	正	治	

日本結核病学会第24回總會(昭和24年4月) 演説抄録

日本外科学会第49回總會(昭和24年5月) 演説抄録

肋膜外合成樹脂球充填術の研究に関連し、久・高亀は種々の高分子化合物の重合物、例えば狭義の合成樹脂に属するメチールメタクリレート、ポリビニールアルコール、ポリ塩化ヴィニール、ポリ醋酸ヴィニール、ポリスチロール、ポリエチレン、合成ゴム、ナイロン、アミラン、廣義の合成樹脂に属するセルロイド、その他の高分子化合物を家兎の皮下、筋肉内、肋膜外、胸腔内及び腹腔内等に充填し、それ等の諸物質が組織に対して如何なる反應を呈するか、又充填部位の異なるに従つて組織反應に如何なる差違が見出されるかに就て比較、検討しつゝあつたが、その間我々は高分子化合物の重合物は程度の差こそあれ、何れも組織に対する異物刺戟が極めて輕微であり、又皮下、筋肉内及び肋膜外等に充填しても異物刺戟の輕微な物質ならばこれを胸腔内に充填しても同じく刺戟の輕微な事を知つた。

以上の事實は肋膜の組織学的構造と相俟つて、高分子化合物を以てする胸腔内充填術の施行可能な事を示唆するものである。そこで我々は肺上部に空洞を有し、上胸部にのみ部分的に遊離胸腔を有する肺結核患者4名に対し、合成樹脂球を用いて胸腔内充填術を試みた。手術方法は4例ともに上背部法をとり、縦に7cm乃至15cmの皮膚切開を加え、第Ⅲ、第Ⅳ又は第Ⅴ肋骨の何れかを1本又は2本夫々4.5cmに涉つて切除した後、平圧開胸術を行つて、上胸部にのみ残つていた遊離胸腔を開き、ここに合成樹脂を充填するのであるが、その際我々は空洞の閉鎖を徹底せしめる目的から第1、第2および第3例では肺の後上部を一部肋膜外で剝離した後、生じた肋膜外の死腔をこれより前方に見出された廣い遊離胸腔につないで両者を單一な腔とし、又第4例では肺の後上部に認められた極めて疎鬆な膜様の肋膜癒着部を胸腔内から剝離して、これより前方に見出された遊離胸腔を後方に向つて若干拡め、斯くして生じた遊離胸腔を主とする腔内に合成樹脂球を充填したのである。用いた充填物の大きさ、形及

び数等は第1例では大きさ 40cc, 卵形のもの2個、第2例では直径 3cm 球形のもの32個、第3例では大きさ 40cc, 卵形のもの6個及び直径 3cm 球形のもの10個、計16個、第4例では直径 3cm 球形のもの14個で本例では更に肺の表面に ポリ塩化ヴィニールを主体とした市販の薄膜をあてその外側に合成樹脂球を入れている。

術後の観察期間は未だ7ヶ月半に過ぎぬが、4例ともに極めて良好な経過をとりつゝあり、空洞を閉鎖せしめ喀痰中の結核菌を陰性化せしめる目的を達し得たのみならず、術後の諸検査成績やレ線所見に就ても正常経過をとつた肋膜外充填例と同様な所見を呈し、両者の間に格別な差違を認めなかつた。殊に胸腔内に異物を充填したにも拘らず 滲出液の瀦溜が予想外に少かつた事及び肋膜外充填術の場合に比して更に肺病巣に近接した部位に異物を入れたにも拘らず、空洞穿孔や結核性膿胸等を併発したものが1例もなかつた事は特に注意すべき点かと思われる。尤も第4例では合成樹脂球の外にポリ塩化ヴィニールを主体とする市販の薄い膜様物をも併せ用いた爲に、これに含まれている高級エステルからなる可塑剤の影響によつて他の3例に比して滲出液の瀦溜が稍々著明に認められたが、数回の試験的穿刺によつて滲出液は漸減し、術後2ヶ月半で全く消失するに至つてゐる。

以上によつて我々は高分子化合物の重合物を以てするならば 胸腔内に固形の異物を充填する事も亦可能な事を実地臨床的にも実証する事が出来た。従来胸腔内に何等かの物質を充填する療法としては氣體を入れる氣胸術と流動油を入れる油胸術としかなく、我々の様に固形物を充填した報告が全くないのに鑑み、我々は以上の如き胸腔内充填術を肺結核への一新外科的療法として御報告申上げる次第である。

以上は遊離胸腔が限局性の場合に就てであるが、現在我々は更に廣汎に涉つて遊離胸腔を有する場合に於ても、胸腔内充填術を行わんとして居り、この場合には廣い胸腔内の任意の部位に充填物を固定する必要がある關係から現在我々は弾力性軟の合成樹脂製、有茎性充填物の製作に勉めているが、これに就ては時を改めて御報告申し上げたいと思う。

以上我々は胸腔内充填術の可能な事を提唱したが、だからと言つて我々は肋膜外に充填するよりも胸腔内に充填する方がよいとの主張をなすものではない。胸腔内充填術はあくまで遊離胸腔を有する場合にのみ行うべきであり、肋膜癒着の廣汎に涉る場合には肋膜外充填術を行うべき事を念の爲申し添える。